

無用なる事を覺つたもの、第三は初めより心理学を研究せずして輕蔑するもの、第四は心理学を以て直接教育に無關係なりと言ふ、忠實なる教育實際家の考である。

(二)心理学の教育に對する價值を疑ひ之れを無視するもの、第一は、教育を以て時代と共に變遷するものと考へる教育一面の性質を恰も、教育全體の特質なるが如く誤信したるものである。第二のものに對しては、發表者は、エルトンの『教育心理』第一章を引いて、之等の人が眞に研究せずして徒らに卑賤なる勞働者に自己を墮せしめるものであると論じた。第三のもの即ち初めから無視するものに對して論じて曰く、教育は全人格と全人格との交渉にして、生きた生命の發展であるからして、科學的分析の到底窺ひ得ざるものである。其根柢を爲すものは哲學上の一種の直觀說である。教育者の兒童に對する立場は、外から傍觀する前者の立場でなく、そのものゝ中に入つて實感する後者の立場である。然し此實感是一種の心理學的事實であるから、人格全體の交渉と言ふ事も、心理學的に研究せらるべきものであると。第四のもの即ち心理学は直接教育に無關係なりと言ふ說、即ち教育者に直接必要な事は、教育の實際の法案に熟達する事であつて、此法案が心理学から來ても、他の科學から來ても何等問ふ處では無いと言ふ說に對しては、發表者はタロツクの『教師の訓練に於ける心理学の位置』を引いて論破した。

要するに發表者の主張の根柢は略ぼ次の如きものである。即ち教育の目的、理想は、教育心理学の興る處では無い。教育心理学はたゞ教育の實際的方面に拂はるものである。然し心理学は教育

實際上の方法及び原理を與へるものではない。教育實際の原理は、内容のない空虚なものである。この原理に内容を與へるものは教育心理学の研究である。教育實際の方法は教育者其の人の工夫にある。この工夫に暗示を與へるものは教育心理学の研究である。尙石神氏の分は次回の完結を待て紹介する事とする。

新著紹介

法華經行者日蓮

文學博士 姉崎 正 治著

本書四篇廿八章「發端」に始まり一生の序文たる「開教と奮進」及び正宗分たる「弘通の中心事業」とを中に挟んで流通分たる「身延隱遁と滅後の付屬」を以て結ばれてある。今先づその卷章節目を追て本書の一斑を紹介し最後に私の所感を記して見よう。

人の天性には宗教的要求があつて心理学上所謂轉心機に際しては各自が享受しつゝある生命の根源をつきとめ現實に營みつゝある生活の中に眼前紛々の現相を超えて更に弘遠なる生々々々の消息を明かにせうとするものである、時は嘉禎の昔安房國清澄の寺虚空藏堂曙の空の薄明り碧い中に一心不亂の祈念、これ生年十六歲轉心機の蓮長が八宗九宗混沌たる間に「日本一の智者」となりて眞佛教を極めんとし「煩悶の血潮」を流した祈念であつた(第一章)、世は末法に入て二百年に垂んとして居る、平安四百年の王朝は破れて世は武人の世となつた、然し平安以來の眞言佛教は深く弘くその根を張つて居る、之に對して宗教改革の要求は諸種の方面に於て新運動を生じた、念佛と禪とはこの主尊となり戒律の

復興は時代不相應の現象ながら却て一部の信仰を惹た、然し之がために多門の佛教は愈々多岐に分れ人の心は迷はざるを得ない、蓮長の煩悶は此に生じた(第二章)、然らば蓮長とは果して何物か以下博士の所謂「法華經の行者」に註脚が加へらるゝのである、彼れは十六歳で出家した(第三章)、蓮長の煩悶は形式に於ては智的であつたが實質に於ては究竟統一ある宗教的信仰を求めらるゝに於て、信仰問題の解決は理智の討究と離れ得ないものだとは彼れの信する所であつた、鎌倉四年の留學を終へ寂山に遊學するや彼れは傳教大師の遺訓の忘れられ學派の論議その多端なるに驚き且つ悲しまざるを得なかつたのである、何事を見ても聞ても批判なしには通さぬ彼れは師に對しても同學に對しても鋭利な論客であつたに違ひない、そしてその研究は思想智識の爲の考慮でなく實に成佛の道を明らかに自他共に救世の大願を具すための考察であつた、そしてその中心思想として「法華經持第一」の信仰が益々深くなつて來た(第四章)、建長五年寂山を辭した彼れは四月廿八日爽味清澄山頂萬籟寂靜の天地閃き躍る旭光を待て師子吼三聲南無妙法蓮華經! 曙の静けさを破つた、蓮長は茲に日蓮となつた、この日彼れの法談は遂に彼に領主迫害放逐の難を感ぜしめた(第五章)、博士は茲に筆を法華經の性質内容に移し今日の言葉をして之を解釋せられ續いて五字題目の意義に及んで居られる(第六章)、さて彼れ日蓮は故郷を追はれて鎌倉に出た、災異は連年頻々として起る、疑問と研究の結果彼れはその災異の因由を謗法に歸し謗法者を責むるは先覺者の責任なりとし、その結果立正安國論は生れ松葉ヶ谷の法難に遭遇した(第七章)、齡十七歳の日朗が

鏡を握つて悲んだ伊豆の流罪は日蓮の身に勸持品の大願を體驗せしめ教機時國抄に依て「法華經の行者」たる意識はその活動の輪廓背景たる五綱の宣明と共に明確になり自己の使命と運命とに深い考慮をなすに至つた(第八章)、謗法の衆生ある限りは之を攻撃してその惡心を折伏しなければならぬ、折伏に對しては反抗が起り迫害が加はる、伊豆の流罪ゆりて歸郷した彼れは小松原の法難に遭遇せざるを得なかつた、然しこの法難に依りて「日蓮は日本第一の法華經の行者也」といふ一生を支配する覺悟がこゝに始めて明確に現はれたのであつた(第九章)、時に蒙古より來牒あり日蓮十一通の書狀を製して諫曉警告に當り特に建長寺道隆に對しては初めて四個の格言を言明した、然し基督が最後の死を決してエルサレムに入る前に暫くガレリアの邊に退き心機熟するを待た様に風の前の一時の静穩はこの時の日蓮の身の上にも來た(第十章)、果せる哉龍ノ口の危機は近きつゝあつた、然し日蓮に取りては「臭き頭をはねられなば沙に金をかへ石に珠をあきなへるが如し」であつた、然るに豫ねて覺悟の一死は終に來らず、一死の後の再生、第二の新生活は彼れの身上に現はれ來つた(第十一章)、行く手には流罪の佐渡が島を控へ依智の秋風北海の冬の波に漂ふこと幾日、彼れは罪の意識と聖者の自覺とに包まれて感慨無量今や一生正宗分の事業に移らんとする(第十二章)、こゝに第二卷「開教と奮進」の條が終る。

佐渡が島、是れ實に日蓮が一生の正宗分を顯揚すべき舞臺であつた、「佐渡の國へ流され候ひ! 以前の法門はたゞ佛の爾前經と思召せ」とは彼れの抱負であつた、彼の悲惨苦痛雪中の流罪生活は

實に自己の運命と使命とに關する自覺を深く促した、流謫の場所は却て弘通活動の新たな中心となつて來た、迫害の壓抑の下には却て信仰の花か咲く、「世は亡び候とも日本國は南無妙法蓮華經とは人毎に唱へ候はんずるにて候ぞ」といふ如き洋々たる希望は北海の孤島中にも湧いて來た、特に流謫第三の年には一期の大事本尊の圖顯が成就した、迫害者の側から見れば流罪は豫期に反した(第十三章)、茲に「法華經の行者」を中心として「生死と久遠の生命」「成佛の理想と淨土の處在」との議論が起らなくてはならぬ、博士はこゝに教理上から彼れ日蓮が自ら任じた使命を伺つて居られる。日蓮は假令へ佐渡の雪中に死すともその一生とその經驗、抱負、努力は過去と現世と共に未來永遠に亘つた生命の體現であり死後萬年に對する重要な任務に關しての一轉機である、現身の生死は過去久遠に淵源し又未來の使命とも聯絡がある、生死の間に不生不滅の理を實現すれば「法華經の行者は久遠長壽の如來也」人界が淨土であるのみならず地獄の中にも淨土あり、生死三途の苦河は涅槃の大海、死出の山は菩提の峯である。開目抄は序分なり觀心本章抄は正宗分なり、本章の圖顯は以て流遁分となすべし(第十四章)、次に博士は前を承け法を弘むる人、開目抄より主師親の徳と行者の生活に説き及び(第十五章)殊に博士がその順序に於て靈量品と相當すると感應せられた第十六章には人の活現すべき法、本章の意義より觀心本章抄に移りて詳解せられ、終りに本因本果と戒壇建立の二問題が正に次に來るべき問題として提擧せられ、次に先づ本因本果の問題に入て居られる。本佛の因行果徳は我々自らに具はつて居るといふ形而上論が基本になつて法華

成佛の理想には三世に至る聯絡があるといふのが本因本果の説であつて、この聯絡が即ち上行菩薩に與へられた精要付屬と法華行者の血脈相承となつて現はれ、その相承流通の結果としてこゝに戒壇建立の問題に入る、成佛の理想は一念三千の觀法と離れず一念三千の觀心は又直に自己の本性を觀、心の本源を探る觀心の行であつてこの行は本因本果の觀念から出た上行の使命、末法の弘通、從つて現世の多難なる生活で實行せられる、しかもこの現在の生活は又實に究竟理想の成就、久遠因果の完成たる佛國の實現、即ち本國土妙を具へた本眷屬妙の體現に外ならぬ(第十七章)、日蓮法華經のために頸の座に臨み、轉じて流刑に處せられ今の流罪は久遠已來の法華經に背き凡夫の生活を重ね來つた罪障消滅の修行である、自分の身は兎に角他國侵逼難の豫言適中に驚いて北條氏の目さめる時が來るに違ひない、その時彼等にして日蓮を迎へ教を請へばよし、然らずば永くこの島に留るとも悲むに及ばぬ、未來萬年の祈のために生をこの島に送らう。時しも、文永十一年流罪ゆりて日蓮鎌倉へと還歸した、然し日蓮の請は遂に容れられなかつた、「力及ばず山林に交り」た日蓮の心裡實に千行の涙があつたに違ひない(第十八章)、こゝに第三卷「弘通の中心事業」の卷終る。

「法華經行者」は俄にその獅子吼を收めて鎌倉を去つた(第十九章)然し「三度諫めて用ひられずば去る」とは日蓮退隱の理由でもなく又目的もなかつた。その目的は實に今まで奮闘逆化に依て購ひ得た滅罪の生活を續け末法に於ける法華經行者の責を全ふし而して此に依て未來弘通の礎を据えようといふにあつた(第二

十章)、こゝに戒壇建立の必要が起る、これ身延退隱意義の積極的方面となるのである、一生の大事本章の顯宜に次て果すべきは來年(第二十七年)の準備である、先づ爲すべき事は末法弘通の中心機關たる戒壇建立の宣言であらねばならぬ、退隱後一週間目に成た法華取要抄はその宣言であつたこゝに三大秘法は完備するに至つた。そしてこの章が特に第二十一に來て神力品と自ら相應したのは恐らく博士感應の力であらう。次に第二十二、二十三章に於ては「上人の教化と門人の人物性格」を觀察し、「四條金吾頼基」に及び、「婦人に對する勸諭」(第二十四章)を経て「各地の傳導と駿州信徒の迫害」に説き及び、終りに報恩を以て倫理的生活の第一歩とする日蓮の思想が舊師道善坊の死に遭て報恩抄となるに至つた(第二十五章)、尋で蒙古の一件(第二十六章)より上行の使命に移り戒壇建立論へと博士は筆を進めて居られる。滅罪生活が同時に本國土妙の理想に進む精進たる所以は法華經信仰と多難生活との結果として明確に其身延生活の意義となつて來た、若し衆生と共に與同罪を滅するならば彼等が同共の住處たる此世界は直に實相の世界、眞理の世界となつて娑婆即寂光土とならねばならぬ、この理想を完全に實現するには世界に於ける法華經の中心たる戒壇を建立する必要がある、身延生活はこの準備であつた、上行の使命を果すべき宇宙的神聖の生活であつた、三大秘法、この顯示に依て日蓮一期の弘法はその結論に達し身後弘通の理想は茲に顯示せられた(第二十七章)而して二十餘年前法華行者の公生活を始める旗じるしとして又末法に於ける法華弘通の宣言、國主國民に對する警告として發表した立正安國論を奮闘生活の一生を経て池上の

床上再び之を講じたのは彼れ日蓮の臨終に稍近い時であつた(第二十八章)、こゝに第四卷「身延隱遁と滅後の付屬」の巻を終ると同時に本書は結ばれてゐる。

以上は本書の目次にもならない位の紹介であらう。言ふまでもなく本書は熱心なる日蓮研究者姉崎博士が「専門の事柄や批評研究の數々は之を略し、成るべく通俗に」されたものであるが、その材料が「徹頭徹尾上人の遺文を骨髄とし又骨肉」とされ、しかもその遺文を取扱ふに「批評研究」の態度に出でられた事は蓋し他の多くの日蓮研究者に於て見る事の出來ない新しい試みであらう、本書は博士自ら前後十四五年、特に最近六七年の間直接上人の遺文に接せられた努力の結晶でその研究には常に宗教學上の通義、特にには完教心理上の比較考慮が大に用ひられ到る處にその研究の苦心の痕が窺はれる、殊に博士自然の立場として日蓮宗門の傳説や前人の解釋等に據られなかつた事は日蓮研究者に大なる歡喜と利益とを與へると言てよい、尙卷末に附せる「書簡、宛名人別、日附及内容梗概」、「身延山中諸人の供養物目錄」や、「上人一生重要事日附太陽曆比較」、「上人一生巡歴地圖」等は多くの眞蹟挿圖と共に大に博士の親切を語るものであると思ふ、博士の眞摯熱誠本書をして「法華經行者」を再現せしめられたといふを憚らぬ、日蓮研究者の最も公平なる指導者であると言て可からう。

尙終りに本書を精讀した折の私の感想を言へば(一)上行の自覺と罪の意識との聯絡に於ては確かに日蓮研究上一新機軸を開かれたと思ふ、啓蒙さるゝ所決して尠少でない、(二)それから十一通書狀の發送と、龍ノ口事件との間に於ける嵐の間の静りや、(三)龍ノ口事

件の取扱法や、(四)寺泊六日間の感慨に關する樗牛博士の叙述を批判修正せられた事や、(五)特に身延入山動機の詳細なる考察や、(六)戒壇思想に關する意見等は確かに博士獨開の研究であると思はれ、その觀察の鋭敏にしてその所論の穩健なる、從來の日蓮研究書と大に趣を異にした所多きを覺へ、將來に於ける日蓮研究者を刺戟し開發する所願る大なるものなるを信じた。

而して最後に私は將來(日蓮の祈禱に對する懷抱や、(二)日蓮の未來に對する現實的胸底が博士の熱心なる研究に依て早く益々明白に澄清調整せられん日を期待せざるを得ぬ。そして又「既定」と「異義」との關係(百四十五頁)に就ては常に痛切に迷暗と不安とに襲はれつゝある弱き私は、元より本書の性質上域外の問題ではあるが、何か機會あらばその關係解決の鍵鑰を與へられん事を御願し度いのである。(東京博文館發行、菊版五七二頁、定價貳圓參拾錢)(本田義英)。

精神科學の基本問題

哲學叢書
第八編

文學士上 野直 昭著

精神科學の研究者にとつて、其の基本問題の論究は、必要缺くべからざる重要な事柄であるにも拘らず、問題の解決が極めて難しいためでもあらうが、未だ明確な概念が一般に行き渡つておらぬ際に、本書の表はれた事は、先づ以て度費に堪へない。本書は、著者が其の序文の冒頭に於て明かに斷はれて居らるゝ様に、ウン卜の論理學第三卷の始めにある、第一章

Die allgemeinen Grundlagen der Geisteswissenschaften

新著紹介

全部を譯出されたものである。『本國のドイツ人すら難解とし、無味とするウン卜の思想』を、極めて忠實に、しかも、平易に譯出しようと試みられた努力の跡は、到る處に見受けられる。もとよりウン卜の思想其ものが極めてわかりにくいから其の忠實なる翻譯に向つて、「平易」とか「面白味」とかを要求するのは、要求する方の無理であらう、原著が既に精讀を要する論述である以上、其の翻譯たる本書に對しても、よろしく粗讀を讀まねばならぬ。そして難解な原著をかくまでに、明確に譯出された譯者の努力に多大の敬意を拂ふべきだと思ふ。殊に所々に註釋を加へて本文の解釋に萬全を期せられておる事は、たゞに原著に對して忠實なやり方である許である許りでなく、讀者に向つても極めて親切な態度である。篤學なる著者の努力の結晶とも見るべき本書を是非精讀せん事を御すゝめする。(東京神田區神保町一六、岩波書店發行、壹圓貳拾錢、深田武)

ワオードの社會學

藤森達 三譯

社會學は元來未だ幼稚の學問であるが、日本に於ては殊に幼稚な學問である。從ひて之に關する著書譯書の數も極めて乏しい、此點からして考ふると漸なる社會學書の公刊は我國斯學界の爲に甚だ善ぶ可き事と云はなければならぬ。それは如何なる價值如何なる程度のものたるを問はない事であるが、殊に其内容が優秀のものなればなほ更の事である。此意味に於て吾人は此「ワオードの社會學」の發行を深く學界の爲に祝し譯者に向ひて其勞を多とせざるを得ない。原著はワオードの體系をデイレレーが約説したる